

平成 28 年度評価委員会の結果（平成 27 年度終了課題に対する事後評価）

<評価委員一覧>

氏名	現職等
後藤 晋	東京大学大学院農学生命科学研究科 附属演習林教育研究センター 准教授
滝田 早苗	埼玉県山林種苗協同組合 理事長
設楽 幸裕	こだま森林組合 代表理事組合長

※所属は、平成 28 年 10 月現在のものです。（敬称略）

<評価結果>

研究課題名	ナラ枯れを防ぐ武蔵野の森再生・循環利用システム技術の確立	
研究担当	森林環境担当	
研究期間	平成 24～27 年度	
研究概要	<p>(1) ナラ枯れ危険度調査の結果、カシナガの捕獲はなかった。また、コナラの枯死情報に基づき所沢市で現地調査をしたが、カシナガによる枯死とは認められなかった。</p> <p>(2) コナラ林伐採地の調査で、萌芽しにくいと考えられていた 50 年生前後の萌芽生存株率は 40～63%と比較的高い値を示した。また、調査地の萌芽生存株率は林齢の増加とともに低くなる傾向があり、高齢化したコナラ林を更新するためには、萌芽を確実に育成するか、必要に応じて植栽が必要と考えられた。</p> <p>(3) 高齢木の原木利用評価では、コナラ・クヌギの利用可能な直材の割合は、末口径 20cm 以上(用材)が 1 割程度に止まった。シイタケ原木として利用が期待された枝部分は曲がりが大きく、シイタケ原木利用は難しいことが明らかになった。</p> <p>(4) コナラ材を天然乾燥させたところ、乾燥開始後 7 か月で平衡状態に達することを確認した。平衡状態での含水率は 11%(JAS D13)相当だった。コナラ材の強度は、家具材として利用されているミズナラを大きく上回った。コナラ材は乾燥に伴う変形が生じるため利用されないできたが、小片化して接着し大判の板材にすることで家具材としての利用を見込めることが明らかになった。</p>	
研究評価	評価の要素	目標達成度：c
		活用見込み：a
	総合評価	A